

F/T Campus 2015

Documents

F/Tキャンパス 2015 ドキュメント



Introduction

この冊子は、フェスティバル/トーキョー 15で実施した人材育成プログラム「F/Tキャンパス」のドキュメントです。

F/Tキャンパスは、文化政策や芸術・演劇を学ぶ様々な大学の学生同士が共に学び、交流し、考える機会をもつことができる場として企画されました。東京・静岡・京都・大阪から計26名の大学生・大学院生が参加し、11月20日[金]から23日[月・祝]までの3泊4日を(うち半数の学生は宿泊も共にしながら)過ごしました。

このドキュメントは企画の背景およびプログラム内容に関する紹介のほか、学生とアーティストとのディスカッションの採録や、参加学生によるレポートによって構成されています。主体的に参加してくれた学生たちの頑張りとともに、F/Tキャンパスの雰囲気を感じていただければ幸いです。

フェスティバル/トーキョー実行委員会

Contents

04 事業概要

選択ゼミ

08 稲村ゼミ「ロジック・モデルを使ってF/Tのインパクトを考えてみる」

11 瀬戸山ゼミ「F/Tキャンパスでの体験をもとに演劇をつくってみる」

14 萩原ゼミ「F/Tキャンパスで観る作品を歴史的・理論的にとらえてみる」

ディスカッション

18 岡田利規(演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰) × F/Tキャンパス参加者

22 三浦基(演出家、地点代表) × F/Tキャンパス参加者

報告レポート

28 岡田路子(大阪大学大学院 文学研究科博士後期課程3年)

29 菅谷仁志(早稲田大学 政治経済学部5年)

31 南風盛もえ(京都造形芸術大学 芸術学部舞台芸術学科4年)

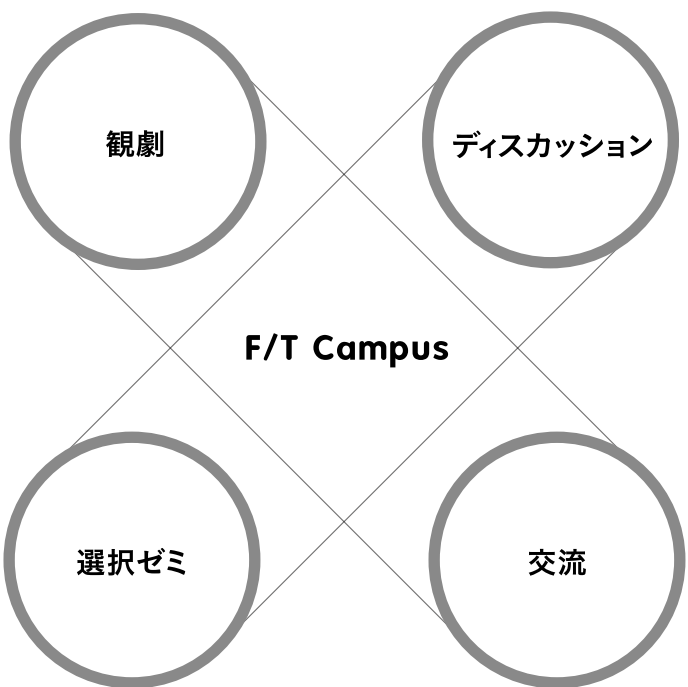
34 F/Tキャンパスを振り返って 横堀応彦



About F/T Campus

世界最先端の 作品を観劇

F/Tで上演した舞台芸術を毎日1作品、期間中に合計4作品、まとめて観劇。



多彩な講師による 「選択ゼミ」

第一線で活躍する講師を迎え、大学とは異なる分野にチャレンジするゼミを開講。

アーティストとの ディスカッション

終演後に行われるアフタートークとは別に、観劇した作品について、演出家と議論できるディスカッションを実施。

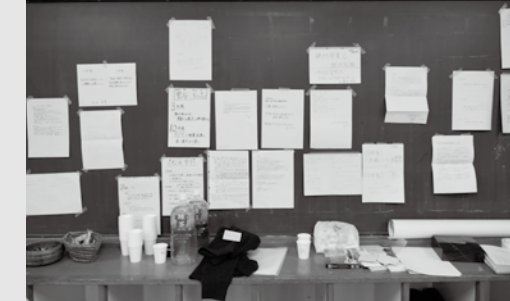
全国各地から 集った学生との交流

今年度は、東京・静岡・京都・大阪から26名の大学生・大学院生が参加。将来のビジョンや観劇体験を共有した。

事業概要

日程	2015年11月20日[金]—11月23日[月・祝]
会場	にしすがも創造舎、国立オリンピック記念青少年センター、東京芸術劇場、あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）、彩の国さいたま芸術劇場
参加費	宿泊あり 14,800円／宿泊なし 10,000円（内訳：観劇チケット代、交流会費）
参加条件	・実施スケジュールに記載の全プログラムに参加すること ・終了後1ヶ月以内にF/Tキャンパスで学んだことをもとにレポートを提出できること
参加者総数	26名 性別：女性12名／男性14名
居住地	関東18名／東海4名／関西4名
F/Tキャンパス期間中の宿泊	宿泊あり14名／宿泊なし12名
参加大学	大阪大学大学院文学研究科、京都造形芸術大学芸術学部舞台芸術学科、静岡文化芸術大学文化政策学部、東京藝術大学音楽環境創造科、日本大学芸術学部演劇学科、立教大学現代心理学部映像身体学科、立教大学大学院現代心理学研究科、早稲田大学文学部・政治経済学部・大学院文学研究科

Schedule



11.20 Fri.

15:00—15:30 宿泊者チェックイン ※宿泊は希望者のみ

17:00—18:30 『Being Faust - Enter Mephisto』観劇 ※希望者のみ(23名観劇)

19:30—21:00 『God Bless Baseball』(作・演出：岡田利規)観劇

全員揃って、怒涛の4日間が始まります。



11.21 Sat.

10:30—11:30 オリエンテーション

12:00—13:00 岡田利規とのディスカッション

13:00—14:00 ランチ

14:00—15:00 市村作知雄(F/Tディレクターズコミッティ代表)とのディスカッション

自己紹介をしつつ、宿題としてお願いした「わたしの3年後/10年後のビジョン」を発表してもらいました。志を語る人や、進路を迷っている人……緊張とワクワクに満ちた色々な顔がありました。にしすがも創造舎は隣が墓地のため、自己紹介の合間にお経が聞こえてきたのが印象的でした。

ディレクターの仕事テーマにディスカッションしました。終了後は、F/Tサポーターの自主企画「豊島区おもいでかるた」で遊ぶメンバーも。

15:30—18:30 選択ゼミ<1日目>

文化政策、実技、理論・評論の3つのゼミが開講。

19:30—21:00 地点×空間現代『ミステリヤ・ブッフ』(演出：三浦基)観劇

21:00—22:30 交流会

盛り上がった交流会。宿泊組は入浴時間の制約のため、後ろ髪引かれつつ、駆け足で帰ることに……。



11.22 Sun.

10:30—11:00 ウォームアップ

小グループに分かれて、『ミステリヤ・ブッフ』の感想をシェア。

11:00—12:00 三浦基とのディスカッション

12:00—13:00 ランチ

小さい学校椅子を机にして、コンビニで買ってきたお弁当を食べる参加者たち(にしすがも創造舎は廃校活用で生まれた場所なんです！)。

13:00—16:00 選択ゼミ<2日目>

18:00—20:30 『地上に広がる大空(ウエンディ・シンドローム)』(作・演出・美術・衣裳：アンジェリカ・リデル)観劇

終演後、参加者の仲間たちと自主的にご飯に行く人たちも！



Group Seminar

11.23 Mon.

8:00—9:00 宿泊者チェックアウト

9:30—11:30 合同ゼミ<選択ゼミで行った内容のシェアと振り返り>

11:30—11:50 振り返り

12:00—13:00 ランチ

15:00—16:30 パリ市立劇場『犀』^{サイ}観劇

ゼミ毎に『地上に〜』の感想をシェアしたあと、各ゼミの2日間を振り返りました。

円座になって、F/Tキャンパスでの体験を振り返ります。宿泊組からは深夜の時間が充実していた!というエピソードが出て、宿泊なし組が羨むひとコマも。また、参加者の声掛けによってLINEグループが作成され、終了後も続くネットワークが生まれました。

終演後、現地解散。めまぐるしいインプットとアウトプットがあった日々でした。事後レポートとして、「F/Tキャンパスを受けて」と「(いまの)わたしの3年後/10年後のビジョン」を提出してもらいました。

食事を前にして、記念写真をバシャリ。(P.32の写真です。)



選択ゼミで行った内容のシェアと振り返り

選択ゼミ

第一線で活躍する多彩な講師を迎え、大学とは異なる分野にチャレンジする「選抜ゼミ」を開講。

[文化政策] [実技] [理論・評論] の3つの角度から関心をひろげました。

【文化政策】稲村ゼミ 〉 ロジック・モデルを使ってF/Tのインパクトを考えてみる

日時 | 2015年11月21日[土] 15:30-18:30 / 22日[日] 13:00-16:00 / 23日[月・祝] 9:30-11:30

場所 | にしすがも創造舎 3-3教室、国立オリンピック青少年センターセンター棟 510 参加人数 | 9人

講師 | 稲村太郎((株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室)

内容 | 今年で8回目を迎えるF/T は、社会にどのようなインパクトを与えてきたのか？ そもそもプロジェクトやプログラムの評価とはどのように行われるのか？ ロジック・モデルという手法を用いてフェスティバルのもたらす成果や効果について考える。

11月21日 [土]

15:30 インタロダクション (概要+自己紹介)

演出・演技など演劇づくりを学ぶ学生から、演劇史や企業メセナなどについて学ぶ学生まで様々なメンバーが集まった。自己紹介のなかで、将来のヴィジョンについても聞くことができた。

👤 参加者からのコメント：稲村先生は丁寧で親切で熱意があるステキな人でした！（大島）

16:00 【概説】プロジェクトの評価とロジック・モデルについて

プロジェクトのフロー、ロジック・モデルのフローの解説を聞き、評価の仕方を学んだ。

17:00 【演習】F/Tキャンパスのインパクトを考える

3～4人のグループに分かれ、ワークシートを使いながら、F/Tキャンパスのインパクトを分析。ねらいや計画を確認した後、結果、成果（～1年）、波及効果（～5年）の順にながら起こりうるのかを考えた。

18:00 【発表】F/Tキャンパスのインパクトについて

グループで話しあったことを全体で共有。ロジック・モデルを使うのは初めての参加者が多く苦戦している様子。将来を見据えた評価をしなければいけないことや、演劇界だけでなく社会やコミュニティといった広範囲へのインパクトを考えるのが難しかった。

11月22日 [日]

13:00 【概説】F/Tについて (+質疑応答)

F/T副ディレクターの小島から、F/Tの開催趣旨、基本方針、歴史などについて説明があった。フェスティバルだからこそその魅力や難しさについても話が及び、質疑応答が盛り上がった。

14:00 【演習】F/T15のインパクトを考える

3～4人のグループに分かれ、F/T15主催プログラム、F/Tトーク、広報の3つの観点进行分析。キャンパス期間に実際に体験したことからインパクトを考えることが出来た。

15:30 【発表】F/T15のインパクトについて

グループで話し合ったことを全体で共有した。「街中での広報活動により、劇場に足を運ばなくても、池袋のイメージに影響を及ぼすのではないか」という論点も出て盛り上がった。その後は合同ゼミに向けて発表準備。

👤 参加者からのコメント：面白かったので、もっと応用の仕方が知りたい！（松永）

11月23日 [月・祝]

9:30 合同ゼミで発表

稲村先生からロジック・モデルの説明をした後、前日のゼミで話し合ったF/T15のインパクトを参加者が発表する形式で行った。最後に稲村先生から総括を話して、発表を終了とした。

👤 参加者からのコメント：新しい分野について考える機会はとても重要でした。それを共有できる人がいたことも良かった！（松崎）

文責：三友運葉（インターン）

ゼミを振り返って

稲村太郎

F/T キャンパスの講師の依頼があったのは、昨年の夏の暑い時期だった。担当の横堀さんから連絡があり、F/Tで新しい企画を考えていて、そのゼミの一つのテーマに文化政策を考えているという内容だった。何か面白いことができたらと興味を持ったのだが、これまでに何かを教えるという経験がなかったので、ややハードルが高い仕事かもしれないと思った。普段の仕事の中で文化政策に関係することもあるのだが、文化政策について何かを教えるとなると全く自信がなかったのである。そうは思いながらも、これまでに学生と交流する機会も少なく、何かのチャンスになるかもしれないと思い、まずは直接、話を聞いてみることにした。

それから数週間後、担当の横堀さんと横井さんとミーティングをすることとなった。横堀さんからはロジック・モデルをつくりながら、評価について学生と一緒に何かを考えるゼミをお願いできないかという提案をもらった。実を言えば、そのミーティングまでに「文化政策における文化とは何か」、また、「文化政策における政策とは何か」を考えるゼミのアイデアを準備していたのだが、フェスティバルとの関係性や学生とのディスカッションを考えると、ややバランスが悪い内容だと思っていた。なので、まずは「文化政策とは何か」ということは別にして、ロジック・モデルを起点に作品の制作や発表の場、そして、それを取り囲む環境までを視野に入れたプロジェクトやプログラ

ムの成果や効果を考えるワークショップを計画した。

私の担当したゼミのタイトルは「ロジック・モデルを使ってF/Tのインパクトを考えてみる」である。ロジック・モデルとは何かを説明するのは容易ではないが、敢えて一言で説明すると、プロジェクトやプログラムの評価を検証する目的に、そのプロジェクトやプログラムの成果や効果として何が期待できるのかを考える手法である。数名でアイデアを出し合い、ディスカッションをしながら進めるのが理想的なため、ゼミではF/Tの成果や効果とは何かを学生と一緒に考えることにした。

まず、1日目にはロジック・モデルの概念や手法を共有した。そして、学生にとって身近な事例からロジック・モデルづくりをするのが良いと考え、F/Tキャンパスが自分たちの将来にどのような意義や価値があるのかを考えるワークショップを行う。このワークショップでは、将来の自分たちの姿を思い描くことから始めたのだが、今、思い返すと、F/Tキャンパスの成果や効果について、数多くのアイデアが出ていたとも言える。例えば、将来、自分が俳優として活躍していると想像した学生は、F/Tキャンパスが将来のキャリアの足がかりになるかもしれないと考え、また、将来、中間支援的な立場でアーティストを支援したいという学生は、このプログラムで出会った人たちと協力しながら仕事をしているはずだと考えた。

その他にも、「どのようにフェスティバルが運営されているかを知る機会になっている」、「世界の演劇の最新の状況をどのようにプログラムしているのかを知ることができた」、「アーティ



ストの創作のアイデアや手法を理解することができた」等、F/T キャンパスの経験や体験を成果として声にする学生も少なくなかった。

その中でも、特に印象的だったのが、「普段、小劇場で作品を観ても、その後にその作品について語り会える仲間が少ないので、F/T キャンパスをその出会いにしたい」という発言だった。これはある意味で小演劇の現状の課題を言い表している鋭い意見だったと思う。

それから、2日目にはF/Tの成果や効果について考えるワークショップを行った。まず、F/Tの実態について理解を深める必要があったので、副ディレクターである小島さんに協力していただいて、フェスティバルの制作や広報、運営についてヒアリングを行った。その後、F/Tの成果や効果を考え、数多くのアイデアが出たのだが、この日の一番の成果はフェスティバルの制作や運営の現場を知ることだった。

2日間のワークショップを終え、自分の活動や劇団でもロジック・モデルづくりたいと考える学生も少なくなかった。ロジック・モデルは将来の構想や計画を時間軸に沿って論理的に検証する有効な手法なため、一度、その概念を理解すれば、多様な活用方法が考えられる。例えば、組織の経営や運営の見直しにも活用することもできるので、評価とは限らずに、助成の申請やプログラムの見直しなど、多様な場面で応用して欲しいと思う。

最後に、F/T キャンパスを振り返って、コメントをまとめたと思う。まず、F/T キャンパスのねらいでもあるのだが、演劇の創作や実演を学ぶ学生、演劇論について学ぶ学生、アートマネジメントや文化政策を学ぶ学生など、異なる専門性を持った人材が出会う機会があることは、それだけで価値があったと思う。ゼミに参加した学生の一人が言っていたように、F/T キャンパスの出会いが一生の付き合いになる可能性がある。しかも、F/T キャンパスの出会いというのは、学生同士の出会いなので、社会人になってからの出会いとはやや異なる、もっとフラットな関係なのだと思う。そう意味では、これから業界を共にする人たちと出会うのは早ければ、早い方が良さだろう。これから演劇とは異なる道に進む人がいたとしても、それは将来の異業種の出会いにもつながっている。30代、40代の社会人で異業種との交流に熱心な人も少なくないが、F/T キャンパスが学生に着目したのはとても斬新的なアイデアだったと言える。

また、学生同士の出会い以外にも、世代を超えた出会いがあったことも特筆すべきことであろう。F/T キャンパスでは、多様なプログラムの下で、F/Tのスタッフ、インターン、アーティスト、

ゼミを担当した講師などが、学校以外の場面で若い世代と交流することができる。私自身を振り返ってみても、仕事上は様々な世代の人たちと付き合いがあるのだが、若い世代と一つの場を共有する経験をしたことで、親密な関係性をつくることができた。例えば、F/T キャンパスが終了し、ある実験音楽のフェスティバルに足を運んだときには、そのフェスティバルでインターンとして働いているメンバーと会うことができ、また、先日、ある劇団の新作公演に行った際には、舞台上で俳優として活躍しているメンバーの姿を観て、応援する気持ちになった。おそらく、F/T キャンパスに参加していなかったら、そういった精神的なつながりを築くことはできなかったかもしれない。そういった意味では、F/T キャンパスが世代を超えた交流のきっかけを与えてくれたことが、学生にだけでなく、事業に関わった人たちにも成果となっているのだと思う。

稲村太郎 Taro Inamura

(株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室

1976年生まれ。大学卒業後、民間の複合文化施設で現代美術の展覧会の企画・制作を担当。現在、株式会社ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室の研究員、公益財団法人セゾン文化財団のプログラム・オフィサー等を務める。文化政策では、事業評価やアーティストのモビリティに関するリサーチを行っている。



Group Seminar

2 【実技】 瀬戸山ゼミ ▶ F/T キャンパスでの体験をもとに演劇をつくってみる

日時 | 2015年11月21日[土] 15:30-18:30 / 22日[日] 13:00-16:00 / 23日[月・祝] 9:30-11:30

場所 | にしがも創造舎3-4教室、国立オリンピック青少年センターセンター棟510 参加人数 | 8人

講師 | 瀬戸山美咲(劇作家・演出家・ミナモト主宰)

内容 | 3泊4日のF/T キャンパスを通して、私たちはどのような体験をするのだろうか？ お互いの体験をインタビューし合ったり、文章を書いたりしながら、その体験を演劇作品にしてみる。

11月21日 [土]

15:30 シアターゲーム

まず、互いの名前と顔を覚えるために「わたし・あなたゲーム」を行った。和気あいあいとした雰囲気で行った。次に、「Go・Stopゲーム」で教室内を自由に歩き回りながら、空間と身体を馴染ませていった。

👤参加者からのコメント：演技経験がないため不安だったが、みんな優しく楽しめました(山田)

16:30 わたしと〇〇の距離感

「演劇」や「戦争」といった言葉との距離感を、身体や動きで表現してみるワーク。表現に込めた意味や思いがわかることで、参加者の考えを共有することができていた。この日にやった「わたしと演劇との距離感」が最終発表にも繋がった。

17:30 F/T キャンパスでの出来事を表現する

F/T キャンパスが始まってからの間で、印象に残っている出来事を、自分なりに身体で表現するワーク。まずは個人の出来事を身体に昇華したあと、3人1組のグループをつくり、小作品を作って発表した。翌日にもう一度発表してみるようになった。

👤参加者からのコメント：実体験を演技するという事はあまりなく、新鮮だった!(林)

11月22日 [日]

13:00 シアターゲーム

前日同様、「わたし・あなたゲーム」からスタート。

13:30 F/T キャンパスでの出来事を表現する

前日のグループ発表を再度行った。観客に説明しなくても、内容を伝えるためにはどうすればいいのか、意見交換を行った。そのあとは、最終発表に向けて調整をした。誰かが指揮をとるのではなく、全員で意見を出し合いながら、合同ゼミでの小作品を作り上げていった。「時間がない!」と焦りながらも、楽しそうに意見を交わして、作り上げていく様子が印象的だった。

👤参加者からのコメント：瀬戸山先生のスタンスに脱帽です!(熱田)

11月23日 [月・祝]

9:30 合同ゼミで発表

参加できる人は早めに部屋へ集合し、椅子の配置や全体の流れの確認を行った。前日までの「F/T キャンパスでの出来事を表現する」、「わたしと〇〇の距離感」のワークを紡ぎ合わせ、小作品として発表。観客となった他ゼミの参加者からは、時折笑いが起こっていた。発表後は、創作のプロセスや扱った出来事を紹介し、発表を終了した。

F/T キャンパスの4日間は私にとっても刺激的な時間でした。私の担当したゼミは「F/T キャンパスでの体験をもとに演劇を作ってみる」と題し、ひとつの作品をつくる実技系ゼミでした。3時間×2日という限られた枠でしたが、濃密で充実した時間でした。

参加者は大学生・大学院生8名と大学生インターン1名の計9人。事務局が普段の専門外のゼミへの参加をすすめてくださったこともあり、実技系の学部に通う人は8名中3名で、演劇史・理論の研究をする人が2名、美術や小説など演劇以外のフィールドで活動する人が2名、制作の勉強をする人が1名という内訳でした。

演じるのは初めてという学生も多かったので、最初は緊張が見られました。1日目は、自己紹介を兼ねたゲームから始め、身体を使ってマッピングする、スカulptチャー（人間彫刻）を作る、彫刻をもとにグループでシーンを立ち上げる、ということをしました。マッピングというものについて少しご紹介しておきます。最初に参加者のひとりに「この場所」（今回ならばゼミの会場であるにしがも創造舎）として部屋の中央に立ってもらいます。そこを起点に、部屋を地図に見立てて、自分の居住地と思われる場所にそれぞれ立ってもらいます。今回は静岡や京都、大阪から参加している学生がいたので、彼らに教室内おさまってもらうために、東京近郊の人はギュッとまとまってもらいました。実際の地図をつくったあとは「心理的」な地図をつくります。今度は中心にいる人に「概念」になってもらいます。今回は「演劇」と「戦争」でおこないました。「演劇」をどう捉えてもらっても構いません。研究対象でも、楽しむものでも、自分が生きるための手段でもなんでもよいので、自分と自分の考える「演劇」との距離、「演劇」に対する姿勢、感情などを全身で表現してもらいます。イメージしやすいように、真ん中の人を仮で「演劇さん」と名づけました。横に立って寄りかかる人もいれば、少し離れ

た高いところにのぼって俯瞰する人もいます。一旦部屋の外に出て、おそるおそるドアの間隙から様子を見ている人もいます。それは学生ならでの反応でした。仕事にしているわけではない、そもそも好きなかどうかはわからない、でも気になってしまいF/T キャンパスにも参加した。そういったもやもやした思いが身体に現れていました。身体の状態が見えてきたら、ひとりずつ何故その場所でそのポーズでその表情をしているのかを尋ね、答えてもらいます。言語化すると失われてしまう感覚もありますが、たとえそう言ったとしても発した言葉と姿勢のズレから、見ている人間はその人の本当の感情を読み取ることができま。最初にこのワークをすることで、私たちは自分自身とほかのメンバーの「現在」を知りました。

次に、昨日から今日にかけて自分が経験したことや感じたことを、マッピングと同じように静止したスカulptチャーになることで表現しました。『God bless Baseball』の客席で隣の席の人がうるさかったこと、劇場のロビーで見た友達の行動が面白かったこと、宿舎に戻って横になりながらあれこれ考えたこと……。ささやかだけれど、自分だけが感じた、自分にしか描写できないことを表現していきます。その後、3人組になって体験を共有して3人芝居にし、できたものを互いに見て評価し合っ作り直すことを繰り返しました。こうして3時間で3つのシーンが立ち上がりました。

興味深かったのは2日目です。1日目に作った3シーンは、台詞で説明する部分も多く、ある意味わかりやすいものでした。そのかわり、観ている人が想像したり考えたり余地がありませんでした。しかし、『God bless Baseball』と『ミステリア・ブッフ』という能動的にコミットしないと捉えられない芝居を立て続けに観て、さらに岡田利規さん、三浦基さんとディスカッションするという経験を経て、演劇というものの幅の広さ、奥の深さ、自由さを実感した結果、彼らの芝居は変質しました。言葉を思い切っすべてなくしてみようか？ あらかじめ台詞や動きを決めるのではなく、あるルールのもと即興的に生み出した



らどうか？ このような発想は、純粋に創作ワークショップだけをやってもなかなか出てきません。並行して演劇を観て、演劇について考えることをしていたからこそ生まれたアイデアでした。

最終日、私たちは合計4つのシーンと初日のマッピングをつなぎ合わせて10分ほどの作品を発表しました。発表したものには、改良できる点はまだまだたくさんあります。また、F/T キャンパスを同じように経てきた人にしかわからない表現もたくさんありました。しかし、演劇とは最初はそういうものだと思われています。ある共同体の中で、自分たちの経験を共有する。そういう意味では、彼らは自分を飾り立てることなく、「今日の自分」を舞台にのせることに成功していました。共同体の外の観客の存在を意識するというのは次の段階ですし、それを意識することだけが演劇ではないと私は考えます。演劇は「観るもの」と同時に「やるもの」です。「観るもの」としての演劇には、芸術としての演劇とエンターテインメントとして演劇という大きくふたつの方向があります。しかし、「やるもの」としての演劇は、さらに多様な可能性を秘めているのではないかと思います。自分で演じてみることで、自分が抱えている問題を自覚したり、物事を考える道筋を発見したり、他者との違いを認識する。今回のように普段は思いつかない自由な発想を手に入れることもできます。また、演じたものを観てもらうことで、初めて気がつくこともたくさんあります。今回、学生たちには「恥じらい」という感情が見えました。人前で表現をすることは恥ずかしい。実技系の学生だけ参加していたら見えて来なかったかもしれない感情です。なぜ演劇をするのは恥ずかしいのか、恥ずかしくない演劇はあるのか、恥ずかしいというのはそもそもどういう感覚なのか。その一点からも考えられることは無限にあります。

演劇をつくるということは簡単ではありません。たくさんの人が関わるし、決めなければならないこともたくさんあります。しかし、一方で誰にでもできるものだということを強調したいです。人生で一度は演劇をやったことがある、その経験が

もしかしたらいざというときに人を救うことがあるかもしれません。ましてや、演劇や演劇にまつわることを学ぶ学生にとっては、実技を経験することは絶対に無駄にはなりません。

F/T キャンパスは、演劇を観ること、演劇を考えること、演劇をやることのバランスが取れたプログラムでした。歴史的理論的に演劇を捉える萩原ゼミ、政策的な面からフェスティバルを考える稲村ゼミは、普段実技をしている学生に新しい視点を与えたと思います。また、そういった演劇にまつわるあらゆる角度からのアプローチを短期間に並行しながらやることで相互に作用し、よい結果を生み出していたと思います。

プログラム全体としては、いろいろな大学の学生が集まり、演劇的な素地がまったく違う者同士が交流していたのが素晴らしいと感じました。大学や研究内容によってここまで「色」が違ふことにも驚きました。そもそも演劇自体、ひとつのジャンルに押し込めるのが本来無茶なものです。その異なる表現へ異なる関わり方をしている人たちが4日間一緒に過ごす。同じ出来事に対しても反応はそれぞれ大きく違っていたと思います。たとえば、今までエンタメ系の舞台しか観たことがないという学生は、最初、今回のプログラムを前に途方に暮れているようにも見えました。しかし、自分が好きだったり理解できたりする人やもの以外と触れ合うという経験こそが私たちの思考を前進させてくれます。そういうことを可能にしたという意味で、F/T キャンパスの意義はとても大きかったと思います。

瀬戸山美咲 Misaki Setoyama

劇作家・演出家・ミナモザ主宰

2001年、ミナモザを旗揚げ。現実の事象を通して、社会と人間の関係を描く。代表作に振り込め詐欺集団をジェンダー的視点から描いた『エモーションレイバー』、震災後の自分自身を描いたドキュメンタリー演劇『ホットパーティクル』、心の基準値を巡る短編『指』など。2016年、パキスタンで起きた日本人大学生誘拐事件を描いた『彼らの敵』が第23回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞。劇団外の活動として、『阿修羅のごとく』（上演台本）、『フィッシュストーリー』（脚本・演出）、『MORSE』（上演台本）など。世田谷パブリックシアター『地域の物語』、ロンドンパブリックシアター『ヒロシマの孫たち』など、コミュニティの人々をつくる演劇にも継続的に携わっている。

3 [理論・評論] 萩原ゼミ) F/Tキャンパスで観る作品を歴史的・理論的にとらえてみる

日時 | 2015年11月21日[土] 15:30-18:30 / 22日[日] 13:00-16:00 / 23日[月・祝] 9:30-11:30

場所 | にしすがも創造舎 理科室、国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟510 参加人数 | 9人

講師 | 萩原 健(明治大学国際日本学部教授)

内容 | F/Tキャンパスで観劇する作品は、演劇の歴史や理論をふまえると、どのように捉えることができるのか? 映像資料や事前に配布した資料などを交えながら演劇作品について議論した。

11月21日 [土]

15:30 ウォーミングアップ(取材・他己紹介)

三人一組に分かれて、大学での学びや興味関心を互いに取材しあった。取材した情報は、他己紹介で全体に共有。その後、スケジュールを改めて確認し、最終日の合同ゼミで各自が担当する部分を決定した。

16:15 『God Bless Basesall』の振り返り

前日に観劇した『God Bless Basesall』についての意見交換。プレヒトの「異化効果」について、大学でどのように教わってきたか説明しあいながら話し合った。

17:00 岡田利規とのディスカッションの振り返り

岡田利規が考える、演劇の作り方について議論をした。ターゲットが決まっていないことから、不条理演劇に近いのではという意見がでた。岡田利規作品の身体性についても話し合った。

参加者からのコメント：自分でも知識を身につける努力をしなければ……(福井)

17:45 『ミステリヤ・ブッフ』の予習

地点の過去作品『ファッツァー』の映像を鑑賞。そのあと、マヤコフスキー『ミステリヤ・ブッフ』についての解説をうけた。「言葉のサーカス」といわれるこの作品が、どのような状況下で制作されたのかを考えた。

11月22日 [日]

13:00 『ミステリヤ・ブッフ』の振り返り

前日に観劇した『ミステリヤ・ブッフ』について振り返った。「言葉のサーカス」をどのような場面で感じたか、参加者からさまざまな意見が出た。第一次世界大戦以降の演劇作品の歴史にも触れた。

13:45 三浦基とのディスカッションの振り返り

作中にでてきた野次とマイクの関係性について、芸術と宗教について考えるとともに意見交換した。ドイツの「観客罵倒」という作品を例に挙げ、観客が舞台上がるということについても議論した。

14:30 『地上に広がる大空(ウェンディ・シンドローム)』の予習

『地上に広がる大空(ウェンディ・シンドローム)』トレーラー映像を鑑賞。原題から読み取れるヒントについて解説をうけた。また、「わたし」を語るアートや、アクションアートについて議論することで、アンジェリカ・リデルの作品が演劇史ではどこに属するのかについて考える手がかりになった。

参加者からのコメント：萩原先生が美術史の面からも豆知識をくれて感動!(南風盛)

15:15 『犀』の予習

『犀』トレーラー映像を鑑賞。イヨネスコ、不条理演劇について解説をうけた。犀や衣装(赤いネクタイ)が何の象徴なのか、それぞれの意見を交換した。

11月23日 [月・祝]

9:30 合同ゼミで発表

2日間のゼミでどんな議論が起きたのかを、参加者から発表した。各々が興味分野のコーナーを担当していたため、しっかりと準備をしたうえで、要点をまとめて発表することができた。

参加者からのコメント：自分の分野以外のことを共有し、作品をさまざまな角度から考察できました!(永瀬)

文責：千葉ゆり(インターン)

ゼミを振り返って

萩原 健

演劇史・演劇理論をテーマにした筆者のゼミ(学生9名)では、まず、F/Tキャンパスの最終日4日目に3つのゼミが集まる合同ゼミでの発表をゴールとして設定した。これに先立つ2・3日目のゼミで行う意見交換の内容を報告発表することにしたのである。この目標設定を共有したあと、続いて発表の分担を決めた。2日目についての報告は3パート分3名と進行役1名、3日目についての報告は4パート分4名と進行役1名、これで計9名である。以降は各パート所要約1時間で意見交換を行った。なお、各メンバーにはF/Tキャンパスの開始1週間前、「演出」や「不条理演劇」ほか、いくつかの概念を説明するテキスト(『演劇学のキーワード』より)が送付されていた。

ゼミはキャンパス2日目の午後に始まったが、メンバーはこれに先立って、1日目に『God Bless Baseball(以下GBB)』を観劇し、翌2日目の昼には演出・岡田利規氏との意見交換(キャンパス参加全学生対象)に参加していた。これを受け、同日のゼミでは(2-1)『GBB』の上演および(2-2)岡田氏との意見交換の振り返りを行うとともに、その晩に観る(2-3)『ミステリヤ・ブッフ』についての意見交換を予習として行った。

『GBB』については、たとえば観客に対してしばしば語りかける俳優の身振りからプレヒトの異化効果が、あるいは戯曲の断片的な構成に對置されるものとして三一致の原則が話題となり、

一方の『ミステリヤ・ブッフ』については、上演主体である劇団(地点)の活動を確認(プレヒト『ファッツァー』上演紹介動画を手がかりにした)、またロシア・アヴァンギャルドとの関連から、メイエルホリドの俳優術ビデオメカニカへの言及があった。そして、いくつかの術語は学生全員にとって既知のものではなく、逐次、すでに学んでいた学生からの説明が試みられ、これを筆者が補った。

翌3日目はゼミに先立ち、午前、『ミステリヤ・ブッフ』の演出を手掛けた三浦基氏とキャンパス参加全学生とのあいだでの意見交換があった。これを受けて、ゼミでは前日の晩に観た(3-1)『ミステリヤ・ブッフ』上演のレヴュー、および(3-2)三浦氏との意見交換のレヴューを行うとともに、同日晩と翌日昼に観る二つの公演、(3-3)アンジェリカ・リデルの『地上に広がる大空(ウエンディ・シンドローム)』と(3-4)イヨネスコ作『犀』(ドゥマルシー=モタ演出)の予習としての意見交換を行った。

『ミステリヤ・ブッフ』上演に関してはサーカスという概念が議論の中心を占めた。また未見の二つの公演については、前者は新作ということもあり、それまでに各媒体で公にされていたテキストの確認にとどまった一方、後者については不条理演劇というジャンルについて、また今回のパリ市立劇場による上演の意義について確認し、要点を押さえることができた(『犀』を読んだことがあり、好きな戯曲だと言ってくれた学生が分担報告の担当を引き受けてくれたのは実に幸いだった)。

ところで、本ゼミのメンバーは東京・静岡・京都の5大学か



ら集まっていた。それぞれに「演劇を学んでいる」が、ゼミの始まりにたくわしく聞けば、主に学んでいるものは、演技であったり演出であったり、映像における演技であったり、演劇を軸とした文化政策であったりした。つまり彼らは普段、互いに大きく異なるカリキュラムのもとで学んでおり、知る機会のないままに残された分野がそれぞれにあった。よって本ゼミでは、彼らがそれまでに教わってきた（あるいはまったく教わっていない）内容のすり合わせに重きを置いた。そしてその際、「こんなにも異なった理解で学んでいたのか」という驚きが学生のあいだにあったように思われた。またそのようすを俯瞰していた筆者にとっても、これは新鮮な光景だった。そこで目にしたのは、現在の日本の大学における演劇教育の現状、ないし見取り図にほかならなかった。よく言えばその多様性を、悪く言えば「整理されていないさま」や「穴の数々」を見た思いがした。

そして最終日4日目、合同ゼミが行われ、本ゼミは上の一連の意見交換の内容を計20分ほどで報告発表した。一方、あわせて他の2つのゼミからも発表があったが、それぞれに独特なものだった。演劇実践をその柱とした瀬戸山ゼミの発表ではそれまでの数日をドキュメンタリー・タッチで構成した寸劇が演じられ、演劇制度を扱った稲村ゼミの発表では実に理論的に行われた議論の報告があった。これらの発表に触れて、おそらく多くの学生たちと同様、筆者も演劇に関する新しい学びのアプローチを知ることができた。

ただもちろん、これらのゼミ活動だけがF/Tキャンパスでの学びだったわけではない。上述のように、公演鑑賞や複数の演出家との意見交換の機会が並行して設けられていた。また特筆すべきことに、参加者の多くは共通の宿泊施設とともに時間を過ごしてもいた。聞けば、夜の時間には打ち解けてくつろいだ雰囲気、上演について、あるいは参加者それぞれの学ぶ環境について、相当の意見が交わされたようだ。この交流は確実に、

将来の人的ネットワークにつながるだろう。演劇に関して広く目配りの利いた、総合的な学習内容を備え、また学生相互の学び(の場)についての理解も深まる、実に充実した3泊4日だった。

筆者の研究との関連で言うと、ニューヨークで1940年代、ドイツから亡命した演出家エルヴィーン・ピスコートアが現地の演劇人およびドイツからの仲間とともに展開した演劇学校〈ドラマティック・ワークショップ〉が連想される。劇作家のテネシー・ウィリアムズやアーサー・ミラー、演出家のジュディス・マリナー(リヴィング・シアター)、俳優のマーロン・ブランドらを輩出したことで知られるが、同校のカリキュラムは、歴史・理論・実践・制度といった演劇の各側面を学びの対象として網羅していた。同様のシステムの可能性を、F/Tキャンパスは感じさせた。もしかすると〈ドラマティック・ワークショップ〉の場合のように、照明や音響といった舞台技術の実際に触れられるメニューもあっていいかもしれない。あるいは、東京の他の組織で行われている同様の取り組みと連携してもいいかもしれない。またあるいは、国際交流を視野に入れ、一部を英語でのセッションにするアイデアもあるだろう。

F/Tキャンパスを通じて将来の演劇文化を支える人々が次々と育ち、またキャンパスの取り組みがベースのひとつとなって、包括的な内容のカリキュラムを持つ演劇教育機関が設立される——そのような理想像を、いま思い描いている。

萩原 健 Ken Hagiwara

明治大学国際日本学部教授

1972年東京都生まれ。明治大学国際日本学部教授。研究テーマは20世紀以降のパフォーミング・アーツ、その歴史と異文化間交流(主に日本とドイツ)。共訳にフィッシャー・リヒテ『パフォーマンスの美学』、共著に『村山知義 劇的尖端』ほか。これまでフェスティバル/トーキョーが招聘したりミニ・プロトコルの作品群を中心に、戯曲翻訳、通訳、字幕翻訳・制作・操作も多く手がける(萩原ヴァレントヴィッツ健、『資本論 第一巻』(F/T09春)には出演)。

ディスカッション

公演後に行われるアフタートークとは別に、鑑賞した作品のアーティストと議論する「ディスカッション」を開催。学生ならではの率直な質問が飛び出て、アーティストの演劇の捉え方や作り方が炙り出される良い機会となりました。



岡田利規とのディスカッション

岡田利規（演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰）× F/T キャンパス参加者

日時 | 11月21日 [土] 12:00 - 13:00 会場 | にしすがも創造舎3-3

——最初のディスカッションには、昨晚観劇した『God Bless Baseball（以下『GBB』）』で作・演出を務められた岡田利規さんにお越し頂きました。素朴なことでも構いませんので、参加者の皆さんから何か質問はありますか？

誤解はいけないことか？

参加者A：『GBB』の演出について質問があります。すぐには理解不可能で、いい意味で誤解できるような演出が散りばめられていたと思いました。たとえばボールを傘でよける演出や、オブジェに水をかけてポタポタと垂れ落ちてくる演出は、原爆から降る黒い雨に見えました。私はそう誤解してしまったんですが、そのようなことはすべて意図して作られているんでしょうか？

岡田：なぜそれを「誤解」だと思ったんですか？

参加者A：岡田さんの意図とずれがあると思いました。

岡田：どうして僕の意図と違うと思ったんですか？

参加者A：作品を通して韓国・日本・アメリカの関係性が見えてきたんですが、アメリカは声だけの登場だったので、まるで別の次元に存在しているように感じました。もしそういった意図が岡田さんにあるのだとしたら、広島と長崎の原爆を想像して自分たちのことに寄せすぎるのは作り手の意図とは違うのかなと思いました。

岡田：ありがとうございます。面白い見解ですね。原爆って思った人、他にいますか？

一同：(ばらばらと手が上がる)

岡田：ありがとうございます。僕が原爆を表現したいという意図を持っていたかという、持っていませんでした。でも「それは作り手の意図ではないから誤解か？」という、その考え方が違うと思います。つまり、誤解というのは「作品に正解や正しい理解があるのだ」という前提に基づいた考え方ですが、僕が考えているのは、作品から何かを受け取って考えたり、ドキドキしてほしいということなので、これといった正解はないんです。例えば「あの巨大なオブジェから、どう水が垂れたらいいのか」ということにこだわって、観客のなかに色々なことを引き起こしたい。原爆のことは考えていませんでしたが、あなたの意見を聞いて、どうして原爆を考えずに作っていたんだろうと思います。こういう風に僕が再発見するんです。それって面白いじゃないですか。

分かることは重要か？

参加者D：分かりにくい芸術作品を観たとき、観客はそこに作品の意味や意図を見出すことで作品を理解しようとしていると思います。そういった観客の欲望について、岡田さんはどう考えますか？

岡田：面白い質問ですね。皆さんにもそういう欲望はありますか？

一同：(何人か頷く)

岡田：それは満足度につながること？ つまり、作者の意図が見い出せたら満足で、よく分からなかったら満足できないのかな？

参加者E：私は演出意図を探すよりは、似たものを観たことがあ

るかで満足度が決まりますね。新しい考え方や価値観が見つければ、いいものが観れたと思います。すごくなめたことを言う、私でも出来るんじゃないかと思わせるような作品には満足しないです。

岡田：面白いですね。でもそれって、結局相手のアイデアが先にあるわけで、後出しじゃんけんみたいなものだよな(笑)。

観たら出来ると思うものって一番すごいことですよ。

参加者F：僕はもしお年寄りの方が『GBB』を観たら、どう感じるのか疑問に感じました。作者の意図を想像することって、現代演劇に慣れ親しんでいる人にとっては楽しくても、そうでない人にとってはどうなのでしょうか。

岡田：いま疑問に感じたと言ったのは、どの立場としてですか？

参加者F：作品の作り手と観客としての両方の立場としてですね。僕は地元が東京ではないので、地元の友人に「あそこの劇団が面白いよ」って作品を薦めても、果たして面白がってくれるのが不安なんです。

岡田：たしかに重要な問題ですね。

参加者G：私は先日、岩手県の西和賀で『ロミオとジュリエット』を題材にした「コンテンポラリー能」という変わった作品に出演しました。劇場にはお年寄りの方も来ていたんですが、終演後「表現したいっていう気持ちが伝わって面白かったと言っていたよ」という感想を聞いて、面白かったイコール演出の意図が分かることじゃないんだと思いました。観客にとって、演出意図はあまり関係ないんじゃないかと思います。

岡田：僕もそう思います。でも僕の作品は演出意図を読み取るように強いてしまっているのかな？ みなさんそう思いますか？

一同：(笑)

岡田：たとえばこの前、劇場近くのカレー屋さんに入ってみたらとても美味しかったんですね。でもカレーに何が入っているか、僕には分かりませんでした。今話していることって、こういうことじゃないかと思うんです。僕はレシピが分からないから作れませんけど、食べて美味しいと思える。それでいいと思うんですよ。

歴史的な視点からも考えてみましょうか。演劇の歴史を大きいスケールで見ると、演出家という仕事が登場したのはごく最近のことなんです。いまだって原理的には、演出家がいなくても、俳優と観客さえいれば演劇作品はできます。演出家の作風などは些末なものであって、演劇固有の本質的な構造こそが面白いんですよ。だからといって、高齢者の方が僕の作品を観て面白いと思うかは分からない。でも、この高齢というは単に年齢の問題だけではなく、価値観が固まった二十代の「高齢者」もいますよね。皆さんの中で、昨日観た作品が分からなかった人はいますか？

一同：(何人から手が挙がる)

岡田：多いですね。なにが分からなかったかを聞くのは、ナンセンスな質問かな？

参加者I：大体の意図は分かったんですが、途中でイチロー役の方が長い時間をかけてバッティングの振りをしているところが分からなかったです。

参加者F：僕の場合は逆で、そこだけ分かって他は全然分かりませんでした。岡田さんには、観客にはここまで理解してほしいという考えがあるのでしょうか？

岡田：説明すれば分かってもらえる、と思っても結局は勘違いに終わってしまった経験があるので、今はそういう考えはないですね。ところで野球のことってどれくらい知ってましたか？

参加者F：あまり詳しくないです。

岡田：それが分からなかった原因なのかもしれませんね。野球が日本と韓国ではポピュラーなスポーツであるのに対し、世界的にはマイナーなスポーツであることは、この作品にとって重要なことなんです。つまり僕は「この作品は世界中のあらゆる人に分かってもらえる作品ではない」ということを自覚して作っています。日本人と韓国人には分かってもらえると思っていましたが、さっき分からないと手を挙げてくれた人も結構いましたね(一同笑)。

でもそれがこの作品の本質なんです。誰に向かって作品を届けるかという点については、同時に二つのことをやりたいと思っています。ひとつは予め決まったターゲットに届けること、もうひとつは瓶に手紙を詰めて投げたらどこの岸に届くようなことです。本当にやりたいのは後者かもしれません。そのためにやる必要があるし、作品自体に価値を持たせるために前者もやりたい。作品をつくる時にはいつも、普段劇場に来ない人にも観てもらいたいと思っています。「劇場に来ない人」というのは、さっきの高齢者のもそうだし、劇場に来る習慣がない人や、いろんな理由で来れない人、さらには死んでしまった過去の人やまだ生まれてない人…。そういった人たちの考えを促すようなものを演劇は持っていると思うんです。

俳優の身体の動き

参加者B：『GBB』では俳優が自身の国籍とは違う役を演じているのに、語られる言葉が実際に体験したことのように感じられる瞬間がありました。そのためにはどういったプロセスを踏んでい

僕のなかにあるのは作品から何かを受け取って考えたり、ドキドキしたりしてほしいということ、正解はないんです。

——岡田利規



作品から何が見えるかは

るのでしょうか。

岡田：例えば日本人の俳優が普通に日本人の役を演じている場合でも、俳優は体験したかのように台詞を喋っていますよね。なので、この質問は「どうやって俳優は演技をするのか」という質問だと思います。

参加者B：作品で使われている身体の動きは、俳優の体験から引き出していくんですか？

岡田：身体の動きは僕にとって重要な要素です。台詞を語ることによって、観客には「台詞の意味」という情報が与えられますが、身体の動きにはそれとは違った情報を与えられる可能性があります。ですから、身体の動きが「台詞の意味」と同じ情報を伝えているだけのものでは面白くないと思います。僕の作品で使われている身体の動きは、俳優の癖や動きの面白さを見つけるプロセスから出来ていきます。例えば俳優のある動きを見て僕が面白いと思ったら、それをもう一度やってもらう。そこには俳優の動きから僕が受け取った「何かしらの情報」を観客にも受け取ってもらいたいと思ったという価値基準がはっきりあります。

参加者B：そういった身体の動きによって、言葉の本質的な部分が出てきているのかなと感じました。

岡田：その「身体の動き」は面白かったですか？

参加者B：色々なことを想像しながら見ました。特にイチローの動きが面白かったです。人の生活の中にあるルーティーンのようなものが、その人を形づくっているように感じられました。

岡田：あの動きはナルシスティックで面白いですよね。

参加者C：いまの話と関係して、人の身体には具体的な動きと抽象的な動きがありますよね。岡田さんはどちら動きとして使いますか？

岡田：たとえば、いま（質問者の動きを真似して）こうやって動いていましたよね？ これはどちらの動きか言えますか？

参加者C：いまの動きは抽象度が高い気がします。

岡田：具体的や抽象的といった言い方をしたくなるのはよく分かります。だけど僕にとってその言い方は、現場で役に立つ実践的な言葉ではないので使いません。動きが具体的か抽象的かは、外側から見れば判断できても俳優側としてはよく分かりませんよね。俳優にとって大事なのは、喋ることやそれに伴う内面の状態と結びつきがある動きかどうかです。ある動きを繰り返し行ったときに、それが内面との結びつきを持っているか、それとも形だけになっているかの違いは俳優でも分かります。僕の基準は「動きと内面の結びつきがあれば良い、なかったら良くない」というはっきりしたもので、そっちのほうが重要なんです。

静かさの演出

参加者G：私は『GBB』を見たときに、劇中で音楽を使わない代わりに「静かさ」を使っている演出だと思いました。静かさを演出するのは難しいことだと思うのですが、どのようにチューニングしているのでしょうか？

岡田：それは良い俳優とやれば出来るんですよ。一般的に「間」の概念は、俳優が喋っているときは言葉という情報があるので面白い、喋っていないときはそうでないからつまらない、という二項対立から生まれてきますが、僕はそう考えていません。僕にとって重要なことは、舞台上に何かしらの情報があるかどうか。台詞だけでなく情報としての「動き」があれば見えて面白いわけです。だから間の概念もあまり持っていません。ただし一般的に俳優という職業は台詞を重要視する傾向があるので、僕の考えとズレが生じることもありますが、良い俳優はみんな分かってくれます。あえていえば、それがチューニングかもしれないですね。

参加者：いいですね。

岡田：いいでしょう？ 良い俳優とやるといいんですよ。

字幕の使い方

参加者G：別の角度からの質問なんですけど、私は『GBB』で使われていた字幕が説明的に見えて邪魔に感じてしまったんです。岡田さんは字幕についてどのように考えていらっしゃいますか？

岡田：でも字幕がないと韓国語のシーンは分かりませんよね。

参加者G：はい。ですが、字幕と俳優がくっついてしまっている感じがしました。だから日本語の台詞のときも字幕を見てしまって、嫌だなと思いました。

岡田：僕たちは最近海外で公演することが多いので、字幕があるのが普通なんです。だから良くも悪くもそういう感覚がなくなってしまうんだと思います。字幕を使っていることに特に積極的な意味はありません。ですが、この作品での狙いがあるとしたら、大前提であるはずの言語を完全に無視して、野球のルールが分かる人と分からない人の断絶が大きいということを描きたかったというのはあります。観客の視線は字幕と俳優を歩き来するので、だんだん頭がぼーっとして何語を聞いているのかよく分からなくなる。日韓問題はどうしても歴史問題と結びついてしまいがちですが、問題を脱白させることで根底に横たわっているものが見えるようにしたいと思いました。実はそういう仕掛けだったと聞いて「そうだったのか!」と思った人いますか…？ いないか(笑)。

演劇は自分や社会を見る鏡

参加者F：これまでみんながしていた話は希望ばかりで、僕は「演劇ってもう終わってるから、そんなことない」と思って聞いていました。観劇して感動した体験を共有できる友だちはいないし、面白って思ってもいつかは忘れるし、演劇って人生に影響ないんじゃないかって思うんです。そのうちに演劇を売っていること自体が、阿漕な商売なんじゃないかって思えてきて。先ほど岡田さんが「演劇固有の本質的な構造」と言っていたことが、僕には「祭り性を売る」ということに感じられました。でもそれってずるくないですか？ 演劇を資本主義としてやっていること自体が間違いなのかも思えてきます。ともかく僕はいま色々悩んでいて辛い時期なんですけど、岡田さんは演劇に絶望したことはありますか？

岡田：ないですね。でも、ない理由は色々あります。置かれてる立場が違うこととか、そうは言っていられないとか。

参加者F：なるほど。

岡田：どこから話しましょうか。「構造」を「祭り」と言い換えているのは面白いと思いました。でも僕がいう構造は祭りとは少し違って、俳優がやることは本当のことではないと了解して観るシステムはものすごいことだ、という意味なんです。苦しうに

「うっ」と言っても、それは演技だと認識されて観られる。僕の演劇にとって大事なのはこの構造のことで、それが便利で人間の役に立っているんだと思います。僕はその便利さを「鏡」と呼ぶことがあります。鏡で自分の姿を見れば、目やにや寝癖に気づいて直せますよね。我々の社会はどのような社会なのか、我々は今どのような時代に生きているのかを見て、社会にある「目やに」や「寝癖」に気づく。そのための鏡に相当するものが、演劇や芸術だと思います。だから、僕は全然絶望していません。だけど、いま言っていたことは分かります。作品を通して考えたことが誰かと話すネタとして機能してないことは大きな問題です。ヨーロッパの歴史において公共性とは、劇場や読書サークルで感想を言い合うところで生まれてきたので。

参加者F：ありがとうございます。ちょっと光が見えました。

岡田：本当？

一同：(笑)

岡田：作品が鏡であることを前半に話した分かる／分からないという話と結びつければ、作品から何が見えるかはあなた自身だということなんです。もしも作品を通して僕の顔が見えてしまったら、その作品は僕のポートレートであって鏡ではない。作品は鏡でなくてはいけません。



『God Bless Baseball』©Kikuko Usuyama

三浦基とのディスカッション

三浦基（演出家、地点代表）×F/Tキャンパス参加者

日時 | 11月22日 [日] 11:00—12:00 会場 | にしがも創造舎 3-2教室

——昨晚観劇した『ミステリヤ・ブッフ』で演出を務められた地点代表の三浦基さんにお越し頂きました。三浦さんに質問がある人から自由に発言してください。

円形舞台と笑いの関係

参加者A：予備知識を勉強せずに観劇したんですが、正直内容はよく分からないけれど面白いという体験でした。上演中にたびたび笑いが起こりましたが、エンターテインメントではないのになぜ笑えてしまったのでしょうか。

三浦：あなたも笑いましたか？

参加者A：最初は笑わなかったんですが、周りの人が笑っているのに影響されて次第に私も笑ってしまいました。

三浦：昨日の本番は、奇跡的にいい回でしたね。円形舞台を使ったのは今回が初めてなんですが、円形というのは客席の電気が消えていても、そこに他の観客がいることを意識せざるを得ない

構造になるんです。だからこそ、今回の作品では笑いを取ることが強く意識していました。

参加者A：そうなんです。

三浦：笑えるか、笑えないかは「間」で決まるんですよ。例えばある俳優が別の俳優をピストルで撃つシーンがありますが、あれはコントなんです。撃たれたらすぐ死ぬのが普通ですが、撃たれたあとに「え、俺が死ぬの？」っていう間があると笑ってしまいますよね。そういう観客の反射も計算に入れて作品を作っているの、昨日の観客の反応は狙い通りでした。他の観客が笑っていると「なんでこんなのが面白いんだ」っていう思いが生まれることもある。でも昨日の場合は笑いが一度にどかっと起きたことで、笑っている自分は少数派ではないことが観客の間で了解されたわけです。

「正直内容がよく分からない」ということでしたが、私たち地点は基本的にナンセンスなコントを作っているようなものなので、意味が分からなくて当然だと思います。でも作品を観ているうちに徐々に免疫がついてきて、宗教的なモチーフが背景にあったり、色々な問題が含まれていることが分かるようになっていくのだと思います。

芸術のもつ力と役割

参加者B：昨日の上演では、作品が進行するにつれて俳優の方のテンションが上がっていくと同時に、観客席のテンションも上がっていったように感じました。私は普段から演劇は宗教に近いのではないかと考えていますが、今回改めてその狂気性や集団心理を感じました。円形舞台がそなえている呪術性のようなものが影響しているのでしょうか？

三浦：演劇のもつ宗教性を少し歴史的に辿ると、神との交信に行き着くんですね。中世の演劇において観客は俳優の身体を通して神との交信を見えています。それが近代になると、観客はプロセニウム（額縁舞台）から人間を盗み見るようになります。このような歴史的な流れを踏まえると、演出家としての僕の仕事は、

誰に向かってどのベクトルで台詞を繰り出せばいいか、その交通整理をすることです。今回の円形舞台では、俳優がぐるぐる走り回ることによってベクトルを失います。そうすることで俳優の身体が純粋に発語する瞬間を捉えることができるのです。「呪術性」ともいえるようなことが自然に出来ていたと思います。

宗教と芸術の問題についてもお話ししましょうか。一般的に宗教には、ある共通の対象をどう批評するか、という側面がありますよね。でも僕は、芸術の役割は宗教のそれとは違うと思っています。

例えば昨日の芝居では俳優が観客に対して「幕を開ける！」と勧誘する意地悪なシーンがありました。これは何かを熱狂的に支持したり、強いリーダーシップを発揮することがダサイと思われる現代において、観客の気持ちをまさぐって刺激を与えることが芸術の大きな役割ではないかと考えたからです。エジプトで演劇を観たときに、カーテンコールで舞台上に観客がみんな上がって俳優と握手しはじめたので驚いたことがあります。なんだこれは暴動でも起こるのかと思いましたが（笑）、その作品は反米を主張した政治劇だったんです。「幕を開ける！」という勧誘はこの逆パターンです。あのシーンで観客が舞台に走りこんできたらびっくりしますよね？

一同：（笑）

三浦：でも、演劇の本来の力というのは、観客を走り来させるものなんです。これは宗教と言っていい。そのラインをぎりぎりで駆け引きしながら、自分の足元を見るのが芸術の役割だと思います。その一線を踏み越えると、政治劇やプロパガンダ演劇に近いものになってしまいます。昨日は観客の反応も良かったので、舞台上で起こることを冷静に考えながら巻き込まれていく環境が生まれていたと思います。とても豊かな時間でしたね。

音楽の偶発性をもたらす即興性

参加者C：作品中にアドリブのようで面白いギャグが沢山ありま



したが、それらはすべて上演台本で決まっているのでしょうか？

三浦：決まっています。即興のように感じたのは、音楽が原因ですね。今回音楽を担当している空間現代は、基本的に台詞は聞かず、自分たちのリズムで信号を送り合って自分たちの時間のなかで音を打っています。そうすると台詞と音楽が衝突する瞬間が生まれて、台詞が聞こえなくなるんですね。そこで今回編み出した仕組みは、音楽と台詞が衝突したら役者が「ギャハハ」と笑って一つ前の台詞からまた言い直すというものです。俳優のキッカケは全部決まっていますが、彼らは音楽の偶発性に反射的に合わせて喋っています。つまり即興的な判断はしないといけないけれど、全てがいわゆる即興ではないのです。

電子の力によって、声を見る

参加者D：私は作品の終盤で、ミュージシャンが使っていたマイクを俳優が奪って歌っていたことにすごく感動しました。あのシーンはどういう風に作られたのでしょうか？

三浦：今回音楽を担当した空間現代はエレキバンドですが、彼らは電気の力を使って音を拡大しているので俳優の生声では絶対勝てないんです。例えばボーカルが生声のロックバンドってないですよね？

一同：（笑）

三浦：でもオペラのことを考えてみてください。オーケストラが生音で演奏しているのに、オペラ歌手がマイクを使ったらバカにされますよね。一般的に生声は、電気を通した楽器には絶対に勝てないんです。そこで今回はあえて、台詞の際間に電気音楽を共存させることを狙ってみました。

ここからが先ほどの質問の答えになりますが、単に俳優がマイクを使うのであればピンマイクを付ければいい。でもピンマイクでは、発話する人の居場所とは違う方向から音が聞こえてくるのでリアリティがない。そこで一本のマイクを奪い合うことにして、マイクを奪い取った人のことを見ることにしました。電気の力を味方につけて、この人がこれから喋るのだと分からせるようにしたんです。マイク争奪戦をクライマックスにおいたのは、そういうわけです。もう少し付け加えると、ボーカルの人のマイクを俳優が使うのは越権行為ですよ。俳優が急にドラムを叩き出したら変でしょう？ ですが俳優が越権行為を働くことで、観客は俳優の声を追うようになります。あなたが「俳優がボーカルのマ

演出家としての僕の仕事は、誰に向かって台詞を繰り返せばいいか、交通整理をすることです。

——三浦基

イクを使ったのがよかった」と思ったのは、喋るはずのないところで喋っている人の発言を見ていたからです。マイク争奪戦を見ることは、声にならない声の奪い合いを見ているということ。あと、俳優が客席の後ろを回って笑ったりもしていますが、あれも声の在り処が分からなことで不気味さの視覚化を狙っていました。

目的をどう異化するか

参加者E：僕は俳優の身体が疲弊していく様子が面白かったです。電気音楽の音はそのままですが、生の人間から出る音は疲れていく感じがして、それを見せたいのかなと感じました。

三浦：その通りです。例えば赤いタイツを履いた俳優が、宝塚のレビューばりにスカートをはひらひら動かすシーンが繰り返しあります。あの動きについては、半周回ったところで必ず疲れてという指示を出しています。ああいうエロティシズムや振付はすぐ飽きてしまうので、同じテンションで一周やってはだめなんです。観客が見たいのは振りが止まる瞬間や、もう一回やろうとしてもなかなか出来ない状態なので、疲れてもう一回走り直した方がより劇的になるんです。こないだ

テレビでハンマー投げ選手の室伏広治さんの特集を見ていたんですが、彼はハンマーを遠くに飛ばすためのイメージトレーニングを、身体を使って何度も練習していたんですね。それを見たときに、身体が彫刻のように美しく感動しました。別にハンマー飛ばさなくていいじゃんと思った。

一同：(笑)

三浦：イメージする姿が身体性を伴っていたんです。やはりハンマーを飛ばすという目的があるからでしょうね。このように、ある目的をもって行われる動きをどうすれば違う角度から見せることが出来るのかということに関心があります。

日本とロシアでの観客の反応の違い

参加者F：先ほど、昨日の公演は奇跡的にいい回だったとおっしゃっていましたが、日本の観客は心が動いていても表に出さない人が多くて、美術館で作品を鑑賞しているような感じがします。

三浦さんにとって、日本って演劇やりづらくないですか？

三浦：そうですね、たとえばロシアで昨日の公演があったとしましょうか。昨日の東京のお客さんの笑いや沈黙などの反応を10

だとすると、ロシアでは70～80はいきますね。これは誇張なしです。あと昨日は終演後にカーテンコールがダブルでかかりましたが、ロシアだと4回はかかりますね。

参加者F：そうなんです。

三浦：客席の電気がついてからも、半分以上の観客が立って拍手しています。もっと言うと、ロシア人は演劇関係者でなくてもチェーホフの台詞が空で言えるくらいの教育を受けているんですね。だからチェーホフの作品で演出が良くなければ観客全員が飽きるし、逆に上手く行けばポジティブな反応が返ってきます。これはチェーホフの作品だからだと思っていたんですけど、先日ロシアでプレヒトの『ファツァー』を上演したらもっとすごい反応が出たので、もうこの人たちやばいと思いました(笑)。

むかしロシアで『かもめ』を上演した時の話ですが、終演後に他の劇場のプロデューサーから「来年はぜひうちにも来てくれ」と声をかけてもらいました。きっと別の作品を希望するのだろうと思ったら「いや、うちでも『かもめ』をやってほしい」と言われてとても驚いたのを覚えています。ロシアの劇場ではレパトリーシステムが成立しているので成功した作品は5年くらいはずっと公演する習慣があります。すると観客は同じ作品を何度も見ることになるので、何度でも見れる作品が良い作品だという意識が観客やプロデューサーのなかに根付いているんです。こういう劇場文化があるからこそ、観客の反応が豊かになっているんだと思います。

ようやく日本で演劇をやることの答えに入りますが、昨日ダブルコールがかかったのは、素直に嬉しかったですね。普段ダブルコールをする文化がないこの国で、お客さんたちが勇気を出して支持してくれたということだから、そういう意味では、これからも日本の観客と一緒にやっていかなくはないと思っています。我々は京都にアンダースローというアトリエを持っていますが、公演を重ねるごとに観客の反応が変わってきて最近ではダブルコールがかかるのも普通になってきました。海外で公演するときは向こうの文化に乗り込んで行きますが、日本ではそうやって観客と一緒に成長していきたいと思っています。でも最後に、これまでの話を全部ひっくり返して答えると、もう亡命したい！ やっぱり嫌気もさして、一年の半分くらいはロシアでいいとも思います。でも、演劇は母国語でないとできないので、演出家は振付家や音楽家のようにはいかないし、別にやる必要もないとは思っています。相反する気持ちがありますね。

だから芸術はやめられない

参加者F：いま話を聞いていて思い出したんですが、美術館に

行ったとき日本人が作品を見て「訳わかんない」って笑っている一方で、外国人が真剣な顔をして見ていたことがありました。こういう反応の差はどこからくと思われませんか？

三浦：まずははっきりと認識しておくべきことですが、芸術鑑賞には知性や知識、経験値が必要です。おそらくその日本人と外国人は、知識のバックボーンが違うんでしょう。でもこれは悲観することではなくて、知識の差でしかないから勉強すればいいんです。今回の作品も、事前に原作を読んでおいたほうが圧倒的に理解度は違います。でも読まないで観た人と、一所懸命勉強して観た人で、どっちが良いとは言いがたい。だから演劇は面白いんです。

最後に一つだけ、今日皆さんにどうしても言っておきたいことがあります。演劇には8割～9割方「正解」が存在します。なぜわたしは興奮してしまったのか、なぜ感動してしまったのか、それは個人の感受性が問題なのではなく、間が計算されていたりして実は正解があるものです。でも、分からない人にはその正

解が分からない。この分からないことをどうやって埋めるかの作業が難しいけれど、これが分かっちゃったらやめられないんです。ここから勝負ですよ。



『ミステリヤ・ブッフ』photo: Takafumi Yamanishi

Reports

報告レポート

参加者全員に提出してもらった事後レポートから、
各選択ゼミを代表して3本ご紹介します。



F/Tキャンパスを受けて

大阪大学大学院 文学研究科博士後期課程3年
岡田 路子

F/Tキャンパスは受講前に想像していた以上に充実した面白いものだった。短い期間に観劇・ディスカッション・選択ゼミが組み込まれている内容の充実もさながら、全体の雰囲気も暖かかった。自発的に参加した参加者たちの情熱、今回は初回だというF/Tキャンパスに込めた企画者側の想い、参加者と企画者の間をきっちりと繋ぎスケジュールを回すインターンの丁寧な仕事、学生を萎縮させず自由に話ができる雰囲気を作り上げたゼミ講師の姿勢、あらゆる要素が組み合わせさり、楽しい場を作り上げていたように思う。

以下に観劇・ディスカッション・選択ゼミそれぞれの感想を書く。

観劇

ラインナップの五作品の内、元々東京に遠征してまでして観てみたいと思っていた作品は原作を知っていた『ミステリア・ブッフ』と『犀』だったが、観劇した結果最も衝撃を受けた作品は『地上に広がる大空 (ウェンディ・シンドローム)』だった。普段大阪に住んでいると、東京でいくら面白そうな作品があっても全く未知の作品を観るために足を運ぶことはなんとなく冒険のような気がして気がひける。全く知らない作品と強制的に出会わせてくれるという意味で、F/Tキャンパスは地方からの参加者にとって良い出会いの場だと思った。

また、観劇後の感想を他の参加者と話し合えたことも良かった。自分が全く心動かされなかった作品を最高だと感じる学生や、自分が感激した作品を嫌いだという学生と、その理由を話し合うことで自分と異なる視点を意識できて面白かった。また、『地上に広がる大空 (ウェンディ・シンドローム)』の場合は三日目の夜の観劇で、他の参加者と既に関係がある程度築かれていたために、劇の感想から個々人の家庭や人生観へ話が展開し魅力的なひと時が生じた。

ディスカッション

ディスカッションは三度設けられており、二人の演出家とF/Tの重鎮市村氏の話を知ることができた。特に面白かったのは市村氏の回だった。F/Tの舞台裏を覗く面白さもさながら、人物の持つ魅力にワクワクした。おそらく、芸術フェスティバルの構成の仕方などの知識は書物やネットサイトなど文字媒体で一定量公開されているだろうが、人物の面白さは会ってみなければ

わからない。市村氏が元々山海塾に居たということにもときめいた。今の文化シーンを動かす重鎮にも現場で走り回ってモノづくりをしていた時期があったということを感じてからは、なんとなくF/Tが単なる企画ではなく人の手で作られる生き物のような気がするようになった。

ディスカッションは楽しかったのだが、学生の方が多すぎて結果的にディスカッションというよりは講演会のような雰囲気になった点が残念だった。もし可能なら次回はもう少し少ない人数でディスカッションができたら良いと思った。例えば、今回演出家の回に、演出家に加えて制作やスタッフも含め三人ほどゲストに来ていただいていたので、学生も三グループに分かれてディスカッションの輪を作る、というようなこともできたように思う。

選択ゼミ

選択ゼミは演劇を作る内容の瀬戸山ゼミを受講した。参加者の名前を呼びつつ歩く、指令に従い動く、といったワークショップでゆるく始まり、二度の銅像のワークショップを経て、最終的に小さな演劇作品を作るという内容だった。

銅像のワークショップというのはF/Tキャンパス開始から現時点までの印象に残った場面や自分の感情を静止身体で表現するというものだ。観劇した作品の内容への戸惑いや夜のラーメン屋での一場面、観客席での出来事など、個々人の感覚を全員で共有することは他者の内面を覗き見る面白さがあった。また、自分が何を面白がっていたのかということへの気づきも興味深く、そしてそれを表現することは自分の気持ちを開放的なものに变化させた。

約六時間ゼミの中で体を動かしたことは観劇にも影響したのかもしれない。三日目最後に観た『地上に広がる大空 (ウェンディ・シンドローム)』を観た時、異様に感覚が惹きつけられたが、その異様な共振とゼミで心がほぐれていたこととは無関係ではないように感じる。

最終日に小作品を発表するという目的は、それぞれが意見を出さざるを得ない状況と三泊四日で何かを成し遂げたという実感を生じた。三泊四日と短いF/Tキャンパスの期間にもかかわらず、満足度が非常に高い理由はこのゼミの占める割合が高いように思う。

今回F/Tキャンパスへの参加者は大阪大学から私一人であり、面白かった分非常に残念だった。次年度にはもっと多くの学部生・院生に参加してほしいと思う。個々の作品の観劇は個々

人ででもできるだろうが、一連のプログラムの中で作品を見ることは全く異なる体験だ。

また、F/Tという大きなイベントの企画関係者に直接会い、自分の中にF/Tとの接点を作ることは東京から離れた地域に住む学生にこそ必要な作業であるだろう。東京に暮らす者ならば生活圏内にあるF/TのノボリやチラシでF/Tとの繋がりをなんとなく感じるができるかもしれないが、大阪ではそのような無意識の繋がりは生まれにくい。東京に個々の作品を観に行っても生まれにくいだろう。繋がりをを感じるには一定の時間が必要だ。その点、F/Tキャンパスは良い場であると思う。

F/Tキャンパスに参加したことで、何か急激に変化するということはなく、今は再び日常に忙殺されている。しかし内面では確実に変化しているし、今回生じた繋がりが将来何かに繋がるかもしれないし、それがF/Tそのものの質を変えるかもしれない。F/Tは現段階では首都圏内の祝祭だが、もしかするとそれがいずれ日本列島全体を巻き込む祭りになるかもしれない。そのような楽しい夢想をしてしまうほど、F/Tキャンパスは魅力のある非日常だった。今後の継続を切に願っている。



F/Tキャンパスを受けて

早稲田大学 政治経済学科5年
菅谷 仁志

F/Tキャンパスの4日間は演劇の見方を大きく変えてしまった。いままで知らなかった世界の一端に触れて、自分の中の演劇という概念が揺さぶられるような。そんな時間を過ごさせてもらった。それは間違いなく「良質な作品を食べ残しなく味わい尽くした」ことが大きいだろう。こんなにも作品に迫れたと思える経験は、今までにはなかったものだ。

参加者の中で、僕は少し異質な立ち位置だと思う。演劇系の学部で学んでいるわけではなく、普段は作品について深く議論するなんてことはない。まずもって観た作品を共有する相手がほとんどいない。そういう中で作品を観ても、理解できなければ思考はそこでストップしてしまう。それ以上思考しようとしても、話す人もいなければ、映画などと違い作品をもう一度観ることも難しい。体系的な「演劇の見方の作法」みたいなものがあるなら知りたいなあ、なんて思っていたり。だからF/Tキャンパスはとても楽しみな反面、不安でもあった。実際最初は「みんなバリバリ勉強している人たちだろうな、ほんとに僕が来ていいのかな・・・」と内心震えていた。

だが始まってしまえば、何のことはない。始まってすぐ、岡田利規氏とのディスカッションで「演劇を観ることは意図を汲み取ることなのか。『分かる/分からない』と『楽しい/楽しくない』は違う次元だ」という話題が出た。ハッとした。何か感想を言わなくては、ちゃんと理解して意味を考えなくてはと思っていた。特にこの会に参加するにあたってはそうだ。素直に「感じる」ことがおろそかになっていた自分の視界が広がる。同じ空間で作品を観て、真摯に感覚を言葉にして紡いでいく。その行為の中に良いも悪いもなかった。何気なく流していた表現に「そんな見方ができるのか」と驚き、一人で分からなかったことを、みんなでもう一度考えていく。面白い作品を、普段の何倍も面白く味わうプロセス。話せば話すほど、一人では到底たどり着けない部分にまで迫れる。そしてどの作品も改めて観たいという気持ちが強くなった。

だからこそ、F/Tキャンパスが終わってから、観れる作品はもう一度足を運んだ。それくらいどの作品も好きになれた。参加する前と比べて確かに、自分自身が作品から受け取れるものが増えていた。2回目だから、というだけではない、なにか。肌で感じる面白さ。ちょっとだけど、分からないものに対して素直になれた気がする。それもこれも、夜通し共に言葉を交わし

てくれる人たちがいたからこそ。共に時間を過ごしてくれたみなさんには感謝しかない。

そんな中4日間を共に過ごした仲間たちが、最終日にゼミ発表の作品を通して投げかけてきた問いがある。それが「あなたにとって演劇とはなんですか?」というものだ。F/Tキャンパスを終えた今、その問いは僕の中に大きく横たわっている。春には僕は新聞社に就職する。今後どうやって演劇に向き合っていくのか。離れようと思えば、完全に離れることもできる。そうでなくても、関わり方は必ず変化する。学生じゃなくなるこのタイミングに、自分の姿勢の根本を問われているようだった。

思えば始まった時から、この問いは投げかけられていた。「3年後・10年後のビジョンは?」という課題。もちろん「何となくこんなことができたらいいなー」という漠然としたものはあるかもしれない。でも今回参加した理由だって、純粋に今、演劇を観るのが楽しいから。もっと演劇を理解できるようになりたいからだ。演劇は面白いけれど、正直に言って将来、飯のタネにするようなつもりで考えてはいなかったし、自分と演劇の10年先のビジョンなんてイメージしていなかった。大切なものではあるけれど、あくまでこの瞬間、関わっていたいもののひとつなのだ。

F/Tキャンパスでは作品を楽しむ以上に、F/Tというイベントを通して、演劇・芸術という業界の未来を考える機会も多くあった。F/Tの裏側のお金の話や、運営の話。聴けば聞くほど、現状のどうにもこうにもできない感じが伝わってくる。アーティストたちがアートで生きていくことは、分かっていたけど難しい。今回の参加者もそれは同じように思える。みんなの将来のビジョンを聞いても、演劇が好きで続けていきたいのに、それぞれが演劇で食っていく未来を描けていないように感じた。

僕は今回出会ったみんなが、演劇を続けていってほしい。活躍してほしい。でも簡単にそうさせてくれない現状がある。僕はひとつでも変えるために何ができるだろうか。そう思ったとき、世の中に出す記事を、今回一緒に時間を過ごしたみんなのために書きたいという気持ちが自然と湧いてきた。始まる前に示した自分の「ビジョン」もいい線いってたんじゃないかと思うけど、よく考えればベクトルは自分だった。今ならこの人に向けて、と顔が浮かんでくる。その感覚は、とても気持ちがいい。

最後に、F/Tキャンパスを通してもっともっと学ぼう、学びたいと思った。「演劇を観るには知性が必要」という三浦基氏の

言葉。「作品はあなたを映す鏡」という岡田利規氏の言葉。今回ここに来るまでは、劇評を書くような仕事はもっと専門的な人たちに任せたい方いいと思っていた。世の中ではたくさんの「批評家」と呼ばれる人たちが日夜書き続けているわけで、それを自分がやる価値はないと思っていた。けれど今は、少しでもいいから作品についても何か書けるようになりたいと考えている。自分のように完全に芸術の畑からでない人間だからこそ書ける何かがあるのではないかと思うのだ。僕はまだまだ、感じたものをうまく言葉にはできない。これから先、自分が受け取れるものを一つでも増やしていこうと思う。刺激から何かを受け取れる教養や知性を、磨きたい。それは演劇作品をたくさん観ることもだし、もっと別の体験をすることで得られるかも知れない。鏡に映る自分が変化していくのが、今から楽しみだ。

たくさんの“きっかけ”をくれたF/Tキャンパス。世の中は「求めよ、さすれば与えられん」なのだと思うされた。まさしく僕にとっての「人生を変えるような舞台」だった。本当にありがとうございました。



みなさんへ

京都造形芸術大学 芸術学部舞台芸術学科4年
南風盛もえ

もっと話したかったなあ、また会いたいなと、いま思っています。関西からの参加者、少なかった！すぐ会えない人ばかりです。次のF/Tキャンパスは、もっと増えますように。

みなさんと話し足りなかった分を、このレポートに質問のような、独り言のような、そういう気分で、書きたいと思います。F/Tキャンパスに参加された皆さんは、どういうきっかけで、この企画を知りましたか？

私は、ある日、大学の先生から電話がかかってきました。「南風盛さんが、なんか一番、行きそうだな〜と思って〜」と、先生は言いました。

4回生になって、卒業制作公演も終わって、一体自分がどう欲で舞台芸術に参加したい(しかも作り手側で)と思っているのか、いまいわからなくなっていたので、というか以前はわかっていたのかな？うーん、なんとなく、ふらふらしている気持ちだったのです。なので、「先生の目には私がそういう人に見えるのか…そうか…」と、まず思い、そしてそういう人、とはどういう人？と思い、企画書を眺めると、書いてありました。

- ①「フェスティバルの作品を効率よく観劇したい…(人)」
 - ②「第一線で活躍するアーティストの話を聞いてみたい…(人)」
 - ③「他大学の学生や先生たちと交流する機会が欲しい…(人)」
- 皆さんはどの(人)が一番近かったですか？

このレポートの冒頭でわかるように、私は③の(人)です。なぜかというと、①②は、一応、本当にただのお客さん、という立場でも、叶うっちゃ叶うからです。私はもうただのお客さんには戻れないです。ということは、自分でもこの文章を書いて気付いたのですが、私はこの企画に、仲間を探しに来ていたのでした。で、確かに、この人たちとは仲間になれそう…みたいな気持ちは、起こりました。

仲間だ！と思う瞬間ってなんでしょう？

舞台芸術作品を見ていて、仲間だ！と思う瞬間、今までありましたか？F/Tキャンパス期間内に見た作品は、どうですか？作り手側の人が「仲間だ！」と思う時と、作らない側の人が思う時とでは、何か差が出てきたりするのでしょうか？どうですか？

これも最近気づいたのですが、私は何か作品を見る時に「頼る」ものを無意識に探していたみたいなのです。それは、何かに感動したい、という思いだったり、理解したい、だったり、あとで話のネタにしたい、だったり色々ありますが、いちばんは、

あなたを知りたい、だと思のです。

「頼りになる仲間」という言葉があるように、「仲間」は「頼りになる」から「仲間」なのでしょう。そうかも。でも「頼れない仲間」でも、仲間から外さないってことは、何か一緒にいたい理由があるはず。私は作品を見ながら、それと、一緒にいることのできる理由を探しているみたいです。でも上演時間は決まっているから、切ないなあ。

岡田利規さん、三浦基さんとのディスカッションがありました。作品のこの質問より、「今日はなぜその服をここにきて来たのですか?」と質問したくてたまらなかったのです(たまたまお二人とも青い服でした)。それは、「あなたの作品」に興味はあるけどまず先に「あなた自身」のことを知りたい、という気持ちでした。「作品を通して」なんかいられなくなっていたのです。なぜでしょう。

またまた最近の話です。心臓は「ドキ、ドキ」と、音をたてていますよね。あの「ドキ」が、一体何の音なのか、知っていますか？脈を打っている音かと思っていたのですが、違いました！これは最近で最も感動した話です！

この話、お気に入りすぎて、もう何回も何人もの人に話しています。なぜでしょう。もちろんお気に入りということも、あるのですが。

たぶん私は、感動がその一瞬で終わることが、ムカつくんだと思います。ムカついてます！面白いこと、嬉しいこと、感動したこと、好きなこと、何回も見たいです。何回も、繰り返したいです。一回で終わるのが許せないです。年に一回の祭りもいいけど、また一年待たせられないです。日常にも、欲しいです。だから、心臓の音の真実を知った感動を、いつまでもいつまでも、引き延ばそうとしているし、他の何かの真実を知った時、消化しないで、貯めておくのです。いつだって感動したいから。生きててよかった！って思いたいです。

先ほどの「仲間かも…」という気持ちは、ここから来ているのではないのでしょうか。みんな、ムカついている人達なのかも？と、思っていたのかもしれない。どうですか？許せてますか？生きててよかった！って、思いたくない人も、いるかもしれないです。なぜですか？

これを読んで、もしよかったら、私はこう思う…と、言葉にしてみたいと思います。そうすれば、次会った時に、すぐ話せます！私もみなさんを見かけたら、話しかけずにはいられないです。その日を、楽しみにしています。



F/T キャンパスを振り返って

横堀応彦

2015年が8回目の実施となったF/Tでは新たな企画としてF/Tキャンパスを立ち上げました。立ち上げにあたっては「どうして始めるの?」「何が問題なの?」「どんなことをするのか?」など様々な議論を重ねました。この文章では、そのような意見交換を通して私自身が考えたことをまとめながら、F/Tキャンパスまでの道のりを振り返ってみたいと思います。

F/Tは2014年よりディレクター体制を新たにし、ディレクターズコミティのメンバーをはじめとするスタッフたちがそれぞれプログラムを提案し協議し合う方式をとっています。「日本で演劇を学ぶ学生たちが一同に会するイベントを行いたい」という企画は、私が2014年に着任して真っ先に提案したもののうちの1つでした。その時に問題意識としてあったのは、日本の演劇教育に対する危機感でした。その危機感の根底には日本の演劇大学における2つの閉鎖性があります。

1点目は大学内から学外への閉鎖性です。作り手を目指す学生にとっては、本来学外の小屋で公演を重ねることでプロへの道が開けるはずですが、学内の施設を使って仲間内で公演を重ねることで消耗していくことが少なくないように思えます(学内公演に携わることが卒業要件になっている大学もあり、そのようなシステムの影響もあるでしょう)。また作り手を目指さずとも、色々な劇場に足を運んで実際の上演をたくさん見ることが何よりの勉強になるはずですが、私自身も大学の授業で「これは本当に面白いから是非観て!」と作品を薦めても「バイトが忙しくて行けません」「交通費がないので行けません」といって時間やお金を捻出できない学生の姿を多く見かけます(しかし他方で観に行く学生がいるのも事実で、そもそも「いまこの演劇がアツいらしい!」というホットな情報が学生に届いていないのではないかと思います)。

2点目はこれと関連する問題ですが、大学間交流における閉鎖性です。それぞれの大学では専任教授陣の指導のもと独自の教育が行われていますが、ひとたび大学に入ると卒業するまで他の大学の学生や先生と交流する機会が殆どないのが現状です。自分の先生の公演に関する情報は届いても、大学で教えていない(けれども面白い)作り手や海外からの招聘公演に関する情報が届く機会はそれほど多くないのではないのでしょうか。芸を習得する際、まずは自分を師の流儀に染めることは重要な第一歩ですが、その後ある時点で師の流儀を相対化し自らの色を見つけていくことで、ようやく作り手として独り立ちすることができ

ます。古くから「守破離」と呼ばれるこのプロセスには、自らの立ち位置を俯瞰して見るステップが欠かせません。ところが今の日本の演劇大学では各大学の先生同士の繋がり(学会活動などが一部あるものの)それほど活発であるとはいえず、学生が自らのポジショニングを行うための決め手は、外へ出ようとする強い意志が本人にあるかどうかであるように思えます。最近では東京演劇大学連盟による合同企画が行われているものの、プロジェクトに関わることの出来る学生はそのうちごく一部だけ。そのインパクトは限定的であると言わざるを得ません。

このような問題意識から、演劇大学における閉鎖性を少しでも取り除くために「面白くてアツい演劇作品が見られる機会」そして「他の大学の学生や先生と知り合うことのできる機会」を作りたいと思い、F/Tキャンパスを立ち上げることになりました。

F/Tキャンパスを立ち上げたもう一つのきっかけには、私がドイツに留学していた際、大学の仲間たちと4泊5日でStudent Affairs (以下、SA) というイベントに参加した経験があります。この企画はForeign Affairsという国際演劇祭(ベルリン芸術祭の一部)のプログラムで、ドイツ国内で演劇(学)を勉強する大学生たちがベルリンに集まって共に毎晩観劇し、翌朝は昨晚見た作品について議論するというものでした(議論のモデレートは予め決められた担当校の学生もしくは先生によって行われます)。宿泊は学生自身で手配しなくてはいませんが、朝食(いわゆるドイツ風朝食)と昼食(スープとパン)はフェスティバルが手配してくれ、参加者同士のコミュニケーションも自然に生まれます。午後の時間帯は3つの若手芸術家グループ(演劇というよりはむしろ美術の文脈に近い人たち)によるワークショップが行われ、参加者は1つのグループを選び3日間にわたってそのアーティストたちの手法を体験しながら学ぶことが出来ます。一般的にこのような企画は「フェスティバル・キャンパス」と呼ばれ、最近ではヨーロッパの多くのフェスティバルで実施されています。F/Tでの仕事を始めてからForeign Affairsのドラマトゥルクと会う機会があり、そこでの意見交換なども踏まえてF/Tキャンパスの骨組みを作っていました。企画を立ち上げてから実施に漕ぎ着けるまでに検討した主要な項目をいくつか挙げてみましょう。

【実施体制】

私自身は企画全体のコーディネーターにあたり、各大学への営業は同じくディレクターズコミティの長原理江(静岡文化芸術大学大学院出身)の力を借りながら、実際の制作業務にはスタッフの横井貴子(日本大学芸術学部出身)があたりました。ま

たF/Tでは初回2009年より、実際の制作現場を経験する機会としてのインターンシップ・プログラムを実施しており(現在F/Tの事務局で働いているスタッフの中には、このプログラムの出身者も少なくありません)、上原彩加(目白大学)・千葉ゆり(日本大学)・三友遥菜(立教大学)の3名が準備段階から最終日まで大きな力を発揮してくれました。またF/Tキャンパスをいかにアーカイブするかについては企画当初から重要な課題と位置づけており、FAIFAIの加藤和也さんには全日程参加していただき、写真と映像の撮影をお願いしました。

【実施日程】

多くの大学は土日が休みですが、1泊2日だけでは十分なプログラムが行えません。そこでカレンダーを眺めながら月曜が祝日に当たっている11/21~23の3連休の週末を選びました。幸いこの週末は同時に上演されている演目が一番多い時期であり、度肝を抜かれる海外演目アンジェリカ・リデル『地上に広がる大空(ウェンディ・シンドローム)』の上演期間でもありました。期間中は1つでも多くの作品を見られるように希望者は金曜日の夕方に追加で1演目観劇できるようにし、正式には金曜日の夜から月・祝までの3泊4日で4作品を観劇できるスケジュールとしました(後から聞いたところによれば、いくつかの大学では月・祝も授業日にあっていたようですが)。また11月下旬は卒業制作と重なる時期でもあり、それが理由で参加できない方も多かったようです。

【プログラム構成】

プログラム構成については基本的にSAの構成を参考にしながら考えていきましたが、F/Tキャンパスでは新たに選択ゼミ&合同ゼミという仕組みを作りました。参加者が3つのうちから1つのグループを選ぶ点はSAと同じですが、SAでは全てのグループがアーティストによる実技系ワークショップであったのに対し、F/Tキャンパスでは実技系に加え理論系とリサーチ系の選択ゼミも開講することにしました。この背景にはF/Tキャンパスを「他の大学の学生や先生と知り合うことのできる機会」にしたいという思いがあります。普段大学で理論系の授業を受ける機会の多い学生にはこの機会に実技系のゼミを、普段実技系の授業

を受ける機会の多い学生には理論系のゼミを、さらに希望する学生には普段あまり学ぶ機会のないリサーチ系のゼミを履修してもらいたかったのです。そして最終日に合同ゼミの機会を設けることで、他の選択ゼミの内容についても各講師と参加者によるプレゼンテーションから知ることが出来るようにしました。ゼミの内容については講師の先生方と相談しながら決めていき、タイトルと大まかな内容が決まったところで参加者に希望調査を行いました。普段勉強している内容とは違った内容に挑戦したい答えが多くの参加者から返ってきたのはとても嬉しく、最終的な人数調整では1つのゼミにできるだけ色々な大学の学生が集まるよう配慮しました。

「観劇→ディスカッション→ゼミ」を1サイクルとし、これを3回繰り返したハードスケジュールにも関わらず、参加した学生たちの集中力は最終日まで途切れることがなくキャンパス内の「熱量」は日々高まりをみせました。ディスカッションに関しては私の進行の至らなざ点もありながら、日々刺激的な議論が行われました。ディスカッションとゼミの内容については本書で詳しくご紹介していますので、そちらをご覧ください。

また参加者には終了後、I.F/Tキャンパスを受けて感じたこと(書式自由)とII.私の3年後/10年後のビジョンを書いて提出してもらいました。(本書には選択ゼミの参加者から1人ずつピックアップしたレポートを掲載していますが、参加者によるレポート集も別途作成していますので、ご希望の方は事務局までお問い合わせください)。

【募集方法と人数】

募集については初年度ということもあり公募は行わず、F/T事務局スタッフの出身校や関係のある大学を中心にピックアップ



ブし、先生方を通して声がけをしていただきました。当初の目標では東京近郊の大学4校から5名ずつで20名+遠方の大学5校から3名ずつで15名の計35名程度を想定していましたが、実際に集まったのは26名。そのうち遠方からの参加者は9名（静岡4・京都2・大阪1）に留まりました。より広く募集を行うことと、遠方からの参加者の割合を増やすことは次年度以降の課題となっています。26名という参加者数は議論するには丁度よい人数で、逆にこれ以上多いと全体を見渡すことが難しいように感じました。

また希望者に対してはフェスティバル側で安価な（1泊1,600円）宿泊先を用意したところ、遠方からの参加者9名に加えて、東京からの参加者6名も宿泊しました。夜は宿泊者たちで議論を深めることが出来た一方、宿泊していない参加者との間に経験の差が生まれたように思います。最終日に行った振り返りでは宿泊した学生から「みんな宿泊した方がいいよ!」という声も上がり、参加者には皆宿泊してもらった方が良くのではないかという案も出ています。

F/Tで働きはじめて以来、「フェスティバルには何ができるのか?」という問いかけを行わない日はありません。現在の私なり

に考えたフェスティバルの存在目的は「一定期間にわたりテーマ性を持った文化的プログラムを集中的に取り上げ、そこに集まる人々に出会いをもたらし、日々の日常に変化を促すきっかけとなる。」というのですが、F/Tキャンパスはその最たるものの1つです。一定期間に集中して色々な作品を観劇すること、あるテーマ性に沿ったゼミを受講すること、日本全国から集まる仲間たちと出会うこと、そこでの体験をもとに日常に変化を起こすこと……。この企画を通して、参加してくれた学生の皆さんが手にした「変化の種」がどのように花咲くか、長い時間をかけて見守っていききたいと思います。

最後になりましたが、本企画実施にあたりご協力いただきました全ての皆様にこの場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

横堀応彦 Masahiko Yokobori

フェスティバル/トーキョー ディレクターズコミッティ
東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。ライブツィヒ音楽演劇大学においてドラマツルギーを専攻。これまでに東京芸術劇場や日生劇場のオペラ公演においてドラマツルグとして参加。立教大学兼任講師、アーツカウンシル東京調査員（音楽・演劇分野）、東京芸術劇場で音楽事業および人材育成事業に従事。



F/Tキャンパス 2015

選択ゼミ講師 稲村太郎 [(株) ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室]
瀬戸山美咲 [ミナモザ主宰]
萩原 健 [明治大学国際日本学部教授]

ディスカッションゲスト 市村作知雄 [F/Tディレクターズコミッティ代表]
岡田利規 [チェルフィッチュ主宰]
三浦 基 [地点代表]

記録写真・映像 加藤和也 [FAIFA]
企画・制作 横堀応彦、横井貴子、長原理江
インターン 上原彩加、千葉ゆり、三友遥菜

フェスティバル/トーキョー 15

主催 フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区 / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン、
アーツカウンシル東京・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

共催 公益社団法人国際演劇協会日本センター

アジアシリーズ共催 独立行政法人国際交流基金アジアセンター

協賛 アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

後援 外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM

特別協力 西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社

協力 東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区長会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、
一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、
特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、池袋ホテル会
株式会社ポスターハリスカンパニー

宣伝協力

平成27年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業
（池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業）

公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド採択事業

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-15-10 東部区民事務所3階

TEL:03-5961-5202 FAX:03-5961-5207

発行	フェスティバル/トーキョー実行委員会
編集	フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 横堀応彦、横井貴子
デザイン	阿部太一 [GOKIGEN]
発行日	2016年7月13日
禁・無断転載	©フェスティバル/トーキョー実行委員会